

近世の土木遺産を活かしたまちづくり活動について

九州工業大学大学院工学研究科 学生会員 ○小 柳 健 太
九州工業大学工学部 正会員 仲 間 浩 一

1. はじめに

北九州市の西側に位置する八幡西区は、北九州市民全体の 4 分の 1 以上にあたる約 26 万人が生活する市内最大の人口を抱える区である。そして、近年同区はそれぞれの地域の特性と文化、歴史を活かした様々なまちづくり活動に力を入れている。また、遠賀川から分岐し、八幡西区楠橋に始まり中間市、水巻町、そして再び八幡西区折尾を経て洞海湾へと注ぐ水路の堀川は、江戸時代の先人達が地域の繁栄と生活の幸福を願い、長い歳月と労苦を重ね幾多の困難を克服して人工的に陸地を掘造った全長 12 km の貴重な運河の遺産である(表-1 参照)。

表-1 堀川歴史年表

1620 年(元和 6 年)	福岡藩主黒田長政、遠賀川の洪水の様子を視察。堀川運河を計画。
1621 年(元和 7 年)	家老の栗山大膳を総責任者に、第 1 期工事【岩瀬村～吉田村】が始まる。
1623 年(元和 9 年)	黒田長政が死去。工事が 128 年間中止になる。洪水やひでりがつづき、多くの死者がでる。
1751 年(寛延 4 年)	6 代藩主 黒田継高により、第 2 期工事【中間村～洞海湾（車返しの難工事）】が再開される。
1757 年(宝暦 7 年)	難工事の末、車返しの切り通しが貫通する。
1762 年(宝暦 12 年)	第 2 期工事完了。則松川に直結し、堀川が洞海湾へ通じる。第 3 期工事【中間の唐戸】が始まり完成する。
1763 年(宝暦 13 年)	川ひらたの運行が始まる。上流の地域（直方や飯塚）に、たびたび洪水が発生する。
1804 年(文化元年)	第 4 期工事【寿命の唐戸】が始まりその年に完成する。これで堀川運河の全線が開通する。堀川流域の村の米のとれ高が増える。
1899 年(明治 32 年)	五平太(川ひらた)が全盛期をむかえる。
1938 年(昭和 13 年)	この年を最後に、堀川から川ひらたがすがたを消す。

堀川は、江戸時代における灌漑用水の確保や年貢米などの運搬、そして明治に入ると石炭の運搬手段を担いながら、流域の人々に大いなる川の恵みを与えていた。しかし、近代に入り運搬の主流が鉄道へと移行していったこと、洗炭することで生じる汚水により汚れたというイメージが付いたことによって、その役割を終えるとともに、堀川を大切にする気持ちが失われ、堀川に対する人々の意識は薄れた。

2. 過去の堀川を考える地域活動

2003 年(平成 15 年)1 月の「堀川を考えるワーク

ショップ(以下 WS)」は、おりお堀川を愛する会の団体、八幡西区、中間市、水巻町、河川管理者である福岡県(以下、実行委員会)と流域住民の協働により、2001 年(平成 13 年)の「堀川を考えるシンポジウム」や 2002 年(平成 14 年)の「わいが堀川塾」などの各イベントをきっかけとして始まった地域活動である。WS では、地域の財産である堀川の再生をテーマに毎回住民の参加者を募りながら、様々なアイデアを出し合い、議論を重ねていく場であった。参加者は、大学生から堀川の歴史に関して知識豊富なお年寄りまでに及んだ。

表-2 これまでの地域活動

2001 年(平成 13 年)	
7 月	シンポジウム「堀川を考えるシンポジウム」を開催
2002 年(平成 14 年)	
8 月	シンポジウム「わいが堀川塾」を開催
11 月	「魅力再発見！堀川ウオーク」を開催
11 月	下流の折尾地区で住民有志が清掃活動を実施
2003 年(平成 15 年)	
1 月	「堀川を考えるワークショップ」を結成
4 月	堀川ウォーキング「堀川散策と吉祥寺の藤祭を訪ねて」を開催
10 月	流域各地区での共同イベント「堀川コラボ 2003」を開催
11 月	シンポジウム「わいが堀川塾 2」を開催

表-2 に示す様に地域活動は、実行委員会が住民と共に、どの様にすれば堀川を人々から愛される良い川にしていけるかを考えるものであった。活動内では、堀川の水質や生物の調査を行ない水質改善のため「EM^注発酵液菌」や「EM^注だんご」を堀川に流す企画を実施した。また、堀川をとりまく人達が堀川に対してどのようなイメージを持っているかを調べる為に、過去 2 回のシンポジウムの内容をまとめたものに加え、小学生が書いた作文から堀川へのイメージを抽出して堀川再生のデータとした。このような活動をもとに「わいが堀川塾」に引き続き、2003 年 11 月に「わいが堀川塾 2」を開催した。そこで同区内を流れる堀川について、この川に対する市民の思いが具体的な環境的対策の動きとなり、かつての堀川を再生するため、実行委員会は、流域住民と協働した。地域の財産として貴重である歴史的河川

が、人の手で造られた川であるからこそ目をかけ手をかけ、活かし続けることが目的ではないかと考えた。そして、実行委員会と流域住民は、かけがえない流域の財産である堀川を愛する活動を通して、流域全体の交流や連携を深め、住みよいまちづくりを目指した。 [注釈 / EM : Effective Microorganisms]

3. 堀川開削 200 周年記念事業計画

1804 年(文化元年)に「寿命の唐戸」が完成し、堀川が全川開通してから 2004 年(平成 16 年)で 200 年を迎えた。そこで、実行委員会は、この大きな節目に、先人達のまちづくりへの情熱や英知を学び、我々が失いかけていた堀川への愛情や知識を取り戻し、素晴らしい未来を開くために「堀川開削 200 周年記念事業」を開催した。本事業は、北九州エコステージ 2004 と連携し、折尾、水巻、中間、楠橋地区を拠点に堀川流域全体の清掃活動を実施する「堀川いっせい清掃」を行なった。水と風と光をテーマにした環境とアートのコラボレーションイベント、河守神社では幻想的な明かりの中で開催する「堀川スカベンジャー2004」や、今年で 4 回目を数える「堀川」をテーマにしたシンポジウムの「堀川サミット」の 3 部の構成で実施されたものである。

4. 堀川スカベンジャー2004 の概要

スカベンジャー (scavenger) とは、「掃除人、拾って歩く人」という意味である。水と風、光をテーマにしたアートやライブイベントを行なった堀川スカベンジャーは、河辺の風、水やライブの音、光の風船や竹/紙灯明の光を通して「堀川の魅力」を拾い集め、美しい堀川を取り戻す「きっかけ」を創るイベントを開催した。各イベントを表-3 に示す。

表-3 イベント企画

企 画	内 容
(1) 風のスカベンジャー	ペットボトルの風車
(2) 光のスカベンジャー	光の風船、竹/紙灯明
(3) 水辺の楽校	五平太船体験・水質調査
(4) 河守ライブ	アコースティックライブ
(5) 堀川 PR	堀川再生運動を PR
(6) 200 周年記録	記録資料を作成

この表-3 に示す企画を幾つか挙げて説明する。

(1)風のスカベンジャーは、周辺流域の小学校やボランティアの方々がペットボトルで 700 個以上の風

車を作成し、これらを 5 ヶ所の橋に飾りつけた。(2)光のスカベンジャーは、河守神社から JR 折尾駅の約 1 kmの歴史ある各ポイントに紙や竹で作った色とりどりの灯明と灯明により照らされた河辺を幻想的に光る LED 内蔵ヘリウム風船を一般参加者やスタッフが手に持ち行進するイベントを実施した。(3)水辺の楽校は、折尾地区の小学生を対象に親子で 40 組 80 名が参加し、昔、遠賀川から堀川を通して、洞海湾まで通っていた五平太船(川ひらた)を再現した船に乗る体験や川の水質調査を通して、自然環境の実態を知る企画を実施した。(4)河守ライブは、夕暮れの河守神社境内で行われた地元のアーティストによるアコースティックライブを開催した。他 2 項目あり、計 6 項目の企画でこのプロジェクトを実施した。残念ながら、イベント当日は台風の影響で、当初の計画よりも縮小したかたちになった。

5. まとめ

水運や灌漑で暮らしを支えた運河堀川について、今後のまちづくりにおける重要な要素でありながら地域の財産として、さらに愛される川に甦らせるため流域自治体 2 市 1 町が実行委員会を組織した。本委員会がシンポジウムや WS の場を設けて 2001 年度事業を開始した。以来、シンポジウムや WS などの開催により堀川再生の気運が除々に高まり、一斉清掃や水質浄化など住民発の活動が盛んになった。そのため、本年度の堀川開削 200 周年記念事業計画を進めるにあたり、多くの方々が参加して頂けたと考えられる。実際、本事業に関して、当初の参加大学は本学だけだったが学生のネットワークなどにより 5 大学の学生(45 名)にまで広がったこと、教育委員会の紹介により流域の 4 校の小学校(302 名)や 5 市民福祉センターの参加、地域住民の方々など協力のお陰で進めることができた。風のスカベンジャーの風車に関しては、当初予定していた個数よりも倍以上の素晴らしい作品を設置することができた。これは、近年の住民参加によるまちづくりが盛んであることから、多くのボランティアスタッフとして参加して頂けた点が挙げられる。今後、この輪を大切にこれからのまちづくりに繋がることを願いたい。

・参考文献

2001 年度 堀川を考えるシンポジウム報告書
2003 年度 第 2 回わいが堀川塾報告書